

# 大学のエドガー・アラン・ポウ

福田立明

## 1 偉大な詩人の仮の宿

第三代大統領 Thomas Jefferson (1743-1826) が、新世界のオクスフォードとなるようにとの夢をかけて創設したヴァージニア大学が学生募集を始めたのは、大統領位を退いてから16年目の1825年のことだった。アメリカのそれまでの大学は、ペンシルヴェニア、コロンビア両大学を例外としてなんらかの宗教的宗派が設立、運営に関わっていた。このリベラリスト大統領が生涯の最後の夢をかけたのは、いかなる宗派からも自由な大学の創立だった。キャンパスとして選ばれたのは、ヴァージニア植民揺籃の地、タイドウォーター地域のジェームズタウン、ウィリアムズバーグでも州都リッチモンドでもなく、アレガニー山脈のブルー・リッジとサウスウェスト山地に囲まれた盆地にあるアルバマール郡シャーロットツヴィル (Charlottesville, Albemarle County) の地だった。Old Dominion (州の俗称) の古都ウィリアムズバーグにある彼の出身大学ウィリアム・アンド・メアリィなど教育界や州内キリスト教会勢力からの反発を想像すれば (Quinn 97)、その教育理念の強さが推し量られよう。高度の政治的判断を迫られる折に、いまなお合衆国大統領が「ジェファソンならどうするだろうか」と自問するために訪れるといわれる——ホワイトハウスからヘリコプターなら一時間とかからない——彼の終の棲家モンティセロ (Monticello) の館は、その近郊の丘陵にある。

1826年2月1日に始まるこの新設大学に第二期生として入学したのが、Edgar Allan Poe (1809-49) だった。入学手続き日は2月14日と記録されていて、ほとんどの評伝はこの聖ヴァレンティンの日をポウがこの郡庁所在地へ来た日としているが、学期開始日からその二週間の間のいずれかの日も可能性としてはありえないわけではない。すくなくとも空想的な要素をも含む伝記では、ポウの養母 Frances (Keeling) Allan が、17歳になって間もないエドガーを伴い、アラン家の黒人 Jim (James Hill) が御す馬車で大学に落ち着くの見届けることになっている (Allen 120-21)。大学進学時のポウの身边には、心理的緊張をもたらす、すくなくともふたつの変化が生じていたので、初めて「家郷」を離れた若者がそのうちのひとつの負担をわずかなりとも軽減しようと、リッチモンドへの帰路に着くジムに恋人 Sara Elmira Royster (Shelton) への——彼女の目に触れる最後の——手紙を託す

ということは (Allen 120)、充分ありえたのかもしれない。以後のエルマイラ宛て恋文は、すべて彼女の父親の手で宛名人の目に触れることなく破棄されることになる。

思春期の初恋と失恋というありがちな事件のほかに、ポウの養父母アラン家には大きな変動が起きていた。もともと養父 John Allan に故郷アーヴィン (Irvin, Scotland) から渡米の動機を与えたリッチモンドの豪商の叔父 William Galt が、1825年3月26日アランも居合わせる場で死亡し、貿易業の不振と資金返済に苦しんでいた彼に莫大な遺産が贈与された。それから三ヵ月後の6月28日、アランは14,950ドルで「モルダヴィア (Moldavia)」と呼ぶ豪邸をメイン・ストリートと5番通りの南東角に求める (Poe Log 64-65)。邸宅には前の住人、アンダルシア出身の Senor Joseph Gallego によってスペイン風の風景庭園が設けられていた。後年のポウの「風景庭園譚」、*“The Domain of Arnheim”* (1846 手書草稿) や *“Landor’s Cottage”* (1849) を生む地形学的想像力は、多感な少年の心に刻みつけられたこのジェイムズ河へと広がるスロープの景観に始まったのかもしれない。この時点で少年エドガーがアラン家の唯一の継嗣であることを信じていたとすれば、Ellison にとっての遺産贈与者 Seabright Ellison は、彼にとってはウィリアム・ゴルト / ジョン・アランにほかならなかったであろう。実際には、その夢想ははかなく消え去ったからこそ、逆にあり余る富をかけて新世界の根源的自然を改造しようとするアメリカ「創世期」のヒーローを描く「風景庭園譚」作品群が生み出されたのだともいえる。

ただポウがこのあらたな住居に居住できたのは、大学入学までの半年余りの短期間でしかなかった。この事実は、彼の生涯の最初でしかも最後の「恋人 / 婚約者」といえるエルマイラとの交際期間について、「ポウ神話」の訂正を迫ることになる。ポウの死後26年を経て記録された彼女の「会話」によると、ふたりが出会ったのはエドガーが5番通りに住んでいるときとされるので、その交際期間はせいぜい半年ということになる (Quinn 92)。それでも、いや彼に愛情を注いでくれた養母と *“Aunt Nancy (Anne Moore Valentine)”* から離れて、初めて自立を求められる孤独な学寮生活だったからなおさらのこと、あらたな愛の依存対象となった少女の不可解な沈黙は、彼の不安を掻き立てずにはおかなかったのかもしれない。

大学新入生のポウが当時のキャンパスの中央芝生 (Lawn) の西側学寮に入ったのは、このような不安定な精神状況のもとにあったときだった。*“West Lawn”* と呼ばれる学生寄宿舍は東をローンに面するアーケード状回廊沿いに並んでおり、その片面柱廊の寮室のあいだに教授の居室と教室を兼ねた *“Pavilion”* と呼称される建物が点在している。ポウの授業時間割は、月曜から土曜日を通して7時30分から9時30分まで担当教授のパヴィリオンでの授業、あとは軍事教練を選択したとしても、長い自由時間を過ごすという日課だった (Poe Log 68)。ポウの学寮同室者と誤解されたこともあった Dr. Miles George (Woodberry 26) の後年の書簡に

よると、ポウはウエスト・ローンの寮室からその西側を平行して並ぶ“West Range”の13号室へ移っている（1880年5月18日付 E. V. Valentine 宛書簡 qtd. in *Poe Log* 69. 編者は5月9日以前とする）。現在、内部を来訪者がガラス張りドアを通して観察できるように保存されているこの「ポウの部屋」は、彼が当初それに当てた、養父からの資金24ドル分で当時購入可能だったと想定される家具、調度で設えられている（O’Neal 50）。同室者がいた事実は、実証されていない。煉瓦造りの柱廊を歩いて扉のまえに立つと、ドアの上に「偉大な詩人の仮の宿（“Domus parva magni poeta”）」というラテン語銘文が掲げられている。振り返ると、柱廊のアーチ状開口部を通してブルー・リッジの峰々——のちに彼が「鋸山（“Ragged Mountains”）と名づける山々——が望まれたことだろう。ウエスト・レインジ13号室に入ると、右手壁面に暖炉、明りは扉に対面する東側の壁面の窓から差し込む。その窓ガラスに刻み込まれた文字記号については、のちに触れることになる。

## 2 学び舎のひとたち

当時の学生は三コースの受講登録をするのが普通であったが、ポウが登録したのは、「古典語」と「近代語」の二学位科目（schools）だった。後日の養父アランへの述懐から、もしもその授業料が与えられていたならば、第三の登録科目が「数学」であったことは明らかである（183 [1] 年1月3日付アラン宛書簡 *Letters* 40）。ジェファソンは書面による求人だけでなく、現在のキャンパス内の建物にその名が残る Francis W. Gilmer をイギリスに派遣して一流の教授陣の確保に努めた。ポウ在学時の教授陣は八名で、倫理学教授で学部長の George Tucker は経済学者、ジェファソンの伝記作者としても著名になる人である。建国の父祖であり自由主義のチャンピオンだった学祖は、教授団と学生の自治を最大限保証するため、学長を置かず、学年制も採らなかった。普通の学生より一、二歳幼い17歳1ヶ月余りのエドガーがこの「学問の村」に入ったのは、この理念の破綻が隠しようもなくなったときだった。

ポウが受講した「古典語」主任教授、George Long はケンブリッジのトリニティ・カレッジから、「近代語」主任教授、George Blaetterman はドイツ出身でイギリス人の夫人とロンドンから赴任している。ロング教授のクラスでは、ラテン語とギリシャ語の両古典語が古典文学、歴史学、地理学などの理解をも目指して教えられた。在学中にポウがアラン宛に出した現存する二通（実際には三通以上はあると推定される）の書面や上記参照の手紙から、タキトゥスの『歴史』、ル・サージュの『ジル・ブラス』をリッチモンドから取り寄せていることがわかるが、前者はロング教授の授業に役立てるためであったろう。アランはのちにル・サージュのピカレスク小説に言及しながら、「怠け者のパンを食した」とポウを詰

ることになるが(1827年3月20日付書簡 qtd. in Silverman 36)、それと同一便でケンブリッジ版の数学二巻本を送りつけているのは、将来家業の手伝いを期待しなくもなかったであろう養父の譴責の意思表示でもあったに違いない(*Letters* 40)。

筆者が直接見た手書きの大学図書館貸出簿(Rb 12/5/2.801 Vault tier III)によると、ポウへの貸し出し記録は、6月13日から11月4日まで6項目あり、これは同記録に直接当たったA. H. Quinnが示すものと一致している(Quinn 103)。初回の借り出しはCharles Rollinの古代史(*Histoire ancienne*)の第1、3、4巻で、エジプト、カルタゴ、ペルシャ、ギリシャの古代文明についての書物である(Hayes 11)。これについて8月8日に同じロランの60巻本の第33、34巻(“hist. Romaine”の括弧書きがある)を借り出している。ポウが他に選択の余地がなかったからとはいえ、フランス語の原典歴史書を読んでいた事実は、彼の語学能力の高さをしのばせて余りある。ただこれまでの諸論者が触れない事実をひとつ加えれば、同貸出簿裏見開きより数頁前に返却期限切れで罰金を課された本の記録があり、そこにポウの名で6月13日貸し出し、その3週間の期限をさらに3週間も超過して7月25日に返却されたロランの第4巻に対して60セントの罰金を科した記録が見える。もしも、ヘイズが推察するように(11)、ロング教授の授業に必要な書物だったとすれば、この記録は学生ポウの困窮度の一つの証しとなるのかもしれない。

8月15日～29日には当時歴史家としてDavid Humeと並び評されることの多かったスコットランドの史家William Robertsonのアメリカ史第1、2巻を、8月29日～9月12日にJohn Marshall, *The Life of George Washington*の第1、2巻をそれぞれ借り出している記録がある。内容的に見れば、彼の関心は合衆国史や初代大統領の伝記というよりはむしろ新大陸開拓史にあり、さらにはヘイズが感知したように(11)、歴史記述の文体そのものに心惹かれたのであろう。9月12日貸し出し記録は“V 9, 10 Voltaire”の記載があるだけで、当時のヴォルテールの全集類が1895年に消失していることもあって、内容をつきとめることができないが、ポウの同級生で図書館員でもあったWilliam Wertenbakerの後年の陳述によれば*Histoire Particulière*とされる(Wertenbaker 17; Quinn 104, 104n.)。11月4日～18日にはNicolas Gouin Dufief, *Nature Displayed in Her Mode of Teaching Language to Man*の1、2巻が最後の貸出書として記録される。これは、人間の心の分析から導かれた短期言語習得法という趣旨の長い副題をつけた書名からわかるように、人気のあった実践的フランス語習得法のテキストである。12月に迫った期末試験を意識して借り出されたものであることは、試験の予定を知ったポウがアランに書き送った9月21日付書簡の内容からも明らかである(*Letters* 6)。

興味深いことには、往時の大学図書館貸出簿には借出者名とともに図書貸し出しのための承認者教授名の記載欄(“By Whose Order”)があり、ポウへの貸出本にはこの本以外はすべてに“GB”のキャピタル文字が記されている。彼の「近代語」教授ジョージ・ブレターマンの頭文字であろうことは、容易に想定される。進歩

主義者であったジェファソンも興味を持ったと伝えられるこの外国語新習得法が、文法、読解を中心とするブレターマンの伝統的外国語教授法とは対立的なものであったことはいうまでもない。のちのちのポウの所論からもうかがえるように、外国語習得法に関しては、彼は反伝統主義者になるが、それでは大学の教授との出会いは、彼にそれほどの影響や感化を与える機会とならなかったのであろうか。

ポウの死から26年後、75歳の古典語教授ジョージ・ロングは、イギリスのポウ資料収集研究家 John H. Ingram の問い合わせに対して、ポウについての記憶がきわめて薄いことから、最上の学生でも最低の学生でもなかったろうという趣旨の返事を寄せている（1875年4月15日付ロング書簡 Miller 285; qtd. in Quinn 101）。在学時から半世紀近く、記憶が薄れるのは避け難いが、学部記録にはポウの名前がロング教授の後任者となる Gessner Harrison に次いで第二グループ7人のうちのひとりとして挙げられている（Faculty Minutes 143）。ちなみに近代語では、上級フランス語で成績優秀者8名のなかにリストアップされている（150）。この学科目の主任教授ブレターマンは博士号を持ち、身なりを構わない、若いドイツ人教師だった。歴史の講義について受講学生から苦情を受けた記録も残る（Silverman 29, 459n.）、ドイツ語訛りの強い彼の活気に満ちたイタリア語授業風景が、アレンの想像力によって彼の評伝中に再現されている（Allen 128-29）。教授がタッソーの詩を英詩に翻案する課題を出したとき、ポウひとりがみごとにそれを成し遂げ、彼の賞賛を与えられた。ブレターマンはのちに、彼の教室兼居住建物パヴィリオンVの塗り替え事件や学生との争いを経て、1838年学生からの罷免請求が出され、二年後の1840年9月職を解かれる。彼が提出する議決案はいつも教授会で否決され、免職時の告発文面に公衆の面前で妻を鞭打ったという記録が残ることからも、その気性の激しさと強烈な個性がうかがわれる。その最期は隣の農園へと続く雪の路上での脳卒中死だったと伝えられる（Bruce 157-60; O'Neil 44）。ポウ自身が大学で出会った教師について語った書簡資料はなにも知られていないが、ブレターマン教授の印象が残らなかったと考えるのは不自然といえるかもしれない。膨大な彼の造型人物に、その痕跡を見つけ出す余地は残るといってよい。

学祖ジェファソンは、ポウが入学した年、その起草者だった独立宣言発令50周年記念日の7月4日に他界する。スピーチやディベートのクラブだったとされる“Jefferson Literary Society”のメンバーだったポウが、静まり返ったキャンパスでその日をどのように迎えたか、憶測するすべさえない。自分の大学の学生を近郊の丘の上の私邸へ食事に招くのが慣わしだったジェファソンの客（W. M. Burwell's Reminiscence, qtd. in Allen 124）のなかに、かつて指摘されたようにポウが含まれていた可能性は（Bruce 208）、残念ながら低く、秋に予定されていた食卓を共にする機会は永久に失われたという推断がある（Kennedy 24）。それに対して、その年の9月にロウタンダが完成して最上階のドームに書籍が運び入れられるまえに、図書館が置かれていたパヴィリオンVIで、ふたりが時折顔を合わせ、話を交

わす机会のあった蓋然性を示唆する伝記作者がいる (Allen 130)。ただ、この建物での図書館は、館員が在館する週一日の前日に扉の外に置かれた箱のなかへ借出図書申込書を投入するという程度のサービスでしかなかったので (Bruce 202)、そういう希望的観測も根拠薄弱といわねばならない。

ポウの作品 “Some Words with A Mummy” (1844) や “Mellonta Tauta” (1849) でなされる大衆民主主義や共和政体への徹底的な揶揄攻撃を見れば、可能性としてありえただけとしても、このふたりの出会いは奇異なめぐりあわせと映る。五千年の眠りから覚めたエジプト人貴族のミイラは、古代エジプトでも13地域州連合で結成した自由主義政体が自画自賛されていたが、結局は前代未聞の専制政治に取って代わられたと語る。専制者の名は、と尋ねられたミイラは、その名は「大衆 (Mob)」だ、と答える (Mabbott 1194)。この寓話は、時代の趨勢となっていた大衆民主主義と人類の進歩思想への痛烈な揶揄であり、これも、このようにしていつも時代の主潮流に対して拮抗作用を果たしてきたアメリカ文学の機能の表れの一例である。もちろん「否」の意思表示を可能にする基盤がその自由主義そのものであったのであれば、その権化であった創立者を持つ大学に学んだことが、詩人の想像力と表現力の自由な羽ばたきに関わったことを無視することはできないであろう。

### 3 青春の挫折

ポウの大学教育を一学年で中絶させる原因になった賭博エピソードについては、すでに語り過ぎられた憾みがあるので、ここでは一部の状況証拠を述べるにとどめる。彼の死後、詩人の人格上の最大の誹謗者になる当の Rufus Wilmot Griswold 編纂のポウの作品集 *Works of the Late Edgar Allan Poe* (Vols. I, II 1850, Vol. III 1856) が刊行され、良くも悪くも彼のその名が知られると、大学でのポウを知るひとたちの証言が相次いで公にされたことは、一部これまでも見た通りである。早い時期の、しかもポウに好意的なワーテンベイカーの証言によると、クリスマス休暇でリッチモンド帰省を直前にしていたポウが、2,000ドルの賭博ゲームでの借金に苦しめられていることを告白していることから、カード遊びに加わった事実是否定しようもない (Wortenbaker 115)。学寮での飲酒、賭博事例が教授会へも報告された時点で、情報を知る者9人のうちのひとりとして彼の名が挙げられ (Faculty Minutes I 131-32)、査問に対し、なにも聞いたことはないと回答したこと (160) が教授会記録に残っている。この金額は、身の回りの世話をする召使を連れてくるほどの富裕層子弟が普通の学生だった当時でも、通常の修学費用の優に四学年分に相当する額だった。

養父との義絶後、アランへの抗議の書簡でポウ自身が見積もった修学最低費用は年間350ドル (*Letters* 40)、アランが実質的に支払ったのは、当初の110ドル、不

足の訴えに送金した 40ドル、それに学期末近くの 100ドルの合計250ドル。金額の不足はいうまでもないが、このような小出しの送金が17歳の学生の目をギャンブルへと向けさせたと推測することができる。ジェファソンのいわゆる “noblesse oblige” の教育理念からすれば、愉しみのためでなく金銭のために遊びに耽るのは、紳士たることを放棄することを意味した。伝記作者は、ポウを悪友と共にその地でいう “peach and honey” の酒宴へと導いた素因を、困窮のせいのカード賭博への依存、ことに賭けに敗れたときのいたたまれなさの解消に求めている (Allen 138)。体質上それに弱い男の、アルコール依存の始まりであった。

とはいえ、ヴァージニア有数の富豪アラン家の養育児として奴隷の召使たちにかしずかれて育ったエドガーが、貧窮をかちちながら身の回りをみな自分で処理する学生生活を営んだわけではない。同窓の学生から養父に送られた金銭請求の手紙からも (1827年 5月 1日付 Allan 宛 G. W. Spotswood の書簡 qtd. in Allen 154)、彼が学友の召使を利用したことが間接的にうかがわれる。アランが支払いを拒絶したのは、ポウのカード賭博の借金だけでなかったことが、彼がシャーロットヴィルで地元の装身具店から購入した服地などの請求書状が後日に繰り返し送付されていることで知られる (1828年 6月 28日付 Samuel Leitch の Charles Ellis 宛書簡 qtd. Quinn 112 n.)。68ドル46セントに上る請求書金額は、現在の常識からすれば、貧困学生があえてする買い物とは信じがたいといえよう。エドガーが大都会リッチモンド出身の学生として、さらには有数の豪商の「子」としての誇りを外見上も保とうと努めたことがうかがわれる。現代風にいえば、「ジョン・アラン」という信用厚いクレジット・カードを利用できた、「エドガー坊ちゃま」という学生の一面をも持っていたのである。

#### 4 窓に刻まれた詩

ポウが在籍していた当時、「乱痴気騒ぎ横丁」 (“Rowdy Row” Allen 140) と呼ばれたウェスト・レインジは、いまツアー客が訪れる秋の「ポウの日」以外静まりかえっている。年に一日だけ室内に入ることが許されるその日に、「ポウの小径」 (“Poe’s Lane”) と名づけられた道をたどって左手の一廊、二番目の13号室のガラス張りドアを入ると、正面になる東側の壁面中央部に、上下二段のスライドする高いガラス窓がある。ウェスト・ローン の寄宿舍列建物との空間に茂った樹木の木洩れ陽がそこから、かつて故郷の「モルダヴィア」のエドガーの寝室から運びこまれたベッドへ射しこんでいる。棧で仕切られた18枚の窓ガラスのうち、外の景色がすこし波打つように見えるものがあるとすれば、それは古い時代の、ことによれば19世紀前半の大学創設期からのガラスと思ってよいのかもしれない。ヴァージニア植民最初の拠点だったジェームズタウン、ウィリアムズバーグ周辺に残る手工業的なガラス細工工場は、17世紀初頭の恒久的な英国植民地建設の動機

のひとつを証拠立てしていると思われる。森林消滅の危機に瀕していた母国ガラス産業の、植民地への工場移植の企てだった。

このウェスト・レンジ13号室の窓ガラス18枚のうちの一枚に、硬い石か、あるいは金属片かで彫りつけたと思われる詩句が残されていた。筆者が研究員として滞在した1980年代には、そのガラスが1974年秋に割れてから十年も経ており、大学の中心的建造物ロウタンダのイースト・オーヴァル・ルームに二枚のガラス板ではさんだ17片の破片として残るだけだった。キャンパス・ツアーの出発点としてそれなりの人目に触れる場所にあるのだが、この遺物の前にたたずむひとの数は多くない。ガラスの破片から引っかき疵の跡のような文字を判読するのは、容易ではないからだ。

大学に残った伝説によれば、という断り書きをつけた上で、この記念物の説明文は、ポウがダイヤモンドでこの短い刻銘文をガラスに刻みつけた、とのいわれを記している。ポウの全集編纂を企図して未完に終わった編者 T. O. Mabbott が、実に112項目に及ぶポウ作と申し立てられた詩編を正典に入れるのを拒否したことからもわかるように、ポウ伝説とは得体知れぬ巨大な幽霊のようなものである。ましてや、小さな破片となったガラス片は、素材の年代分析でもしない限り、いつのものかはわからないし、後年の詩人の優雅な手跡と金釘流の掻き痕を並べて筆跡鑑定しようというのも無謀な試みというほかない。物理的な解明手段は事実上、閉ざされているのである。マボットがたとえ大学でのポウ伝説を聞き知っていたとしても、編書巻末に付した正典としては疑わしい詩編（“Apocrypha”）のリスト中にさえこの刻銘文を加えなかったのは、学問的良心の証しといってよからう（497-514）。窓ガラスに刻まれた文字は、詩行を改めて、つぎのように読める。

O' thou timid one,  
don't let thy form rest in slumber  
within these unhallowed walls  
for herein lies the ghost of awful crime.

（おお、なんじ、小心者よ、この不浄な壁のうちに身を横たえ、まどろむな  
かれ。この部屋には恐るべき罪の影あるゆえに）

ポウ自身の作とすれば、飲酒や賭博に耽った自責の念の発露であり、この部屋での出来事が“William Wilson”（1839）のオックスフォード学寮のいかさまカード賭博描写（Mabbott 440-44）のもとになっていると考えられるので、呪われた部屋とそこでの眠りへの恐怖は、容易に納得される。それとは逆に、もしも彼の作でないとするれば、この寮室が改装される1942年（O'Neal 50）までの115年程のあいだにここに入居した多くの寮生のうちのひとりの作ということになる。この場合、その作者が先住者の正体を知っての上でのこととすれば、私たちはその詩才にただ



O' thou timid  
 one, don't let  
 thy form rest  
 in slumber within  
 these unhallowed  
 walls for herein  
 lies the ghost of  
 my ~~awful~~ crime

【図】 West Range No. 13のボウの寮室の破損窓ガラス片に  
 刻まれて残る詩句の筆者による模写

感心するばかりということになろう。

いずれにしても正反対の推論が成り立ち、結論は得られないが、一、二のボウの詩句との対比をしておこう。彼の親筆とされる草稿で年代がきわめて近い短詩句としては、アレンがEllis & Allan 商会の1824年11月のファイル中から発見した“Poetry by Edgar A. Poe”の署名入りの二行連句がある。

Last night, with many cares and toils oppress'd,

Weary, I laid me on a couch to rest— (Allen 76 illus.; Mabbott 6)

(ゆうべ、あまたの心労に打ちひしがれて、疲れた身を寝椅子に横たえ休んだ)

これはマボットも「現存するもっとも早い時期の作」として編纂書に収録している(5-6)。紙片には、のちに養父アランが資産計算に使った跡があるが、端麗な細字で記されたこの連句の筆跡とガラスの文字の書体には、行末の“t”の書体に差異が認められるものの、全体的に見れば、イングラムのボウ・コレクション中の詩人の遺墨のそれと比べて、これは困るという文字を見つけ出すこともできなかった。両者を読んですぐに気づくのは、いずれもが、身を横たえること、しかもこころの安らぎが得られないこと、を表現していることである。

ちなみに、窓ガラスの詩からキーワードとして、“crime,” “slumber,” というふたつの名詞と“unhallowed”という形容詞の3語を選んで、ボウの最初の公刊作 *Tamerlane and Other Poems* (1827) 中の“Tamerlane”の最初の稿(MabbottではA版26-39)の詩句から検索すると、早くも5行目に“crime”が、44行目と47行目にそれぞれ“slumber,” “unhallow'd”が現れる。「罪」は窓ガラスにおけると同様、「運

命に抗うことは罪もあえて夢見ぬところ」(Mabbott 26)と人格化されている。窓ガラスの詩で「不浄な壁のうちで」と換喩的に形容する限定詞“unhallowed”は、魂への浸透力を持つ「不浄な（あるいは罪深い）感情」として表現されている。この長詩の初期稿の多くはポウが14歳にもならない1821-22年頃に書かれたといわれ(Mabbott 21)、出版前年に当たる大学在学中にも推敲や執筆がなされていた可能性を否定し去ることはできないと思われる。

ポウが同窓生たちを印象づけたのは、その詩才ばかりでなく人並み優れた画才によってでもあった。まえにも引用したマイルズ・ジョージ博士の後年の回想では、興に乗ると彼は炭を手にして寮室の壁面にみごとな手さばきで「奇抜で、風変わりで、グロテスクな画像」を描き、一座の連中に先ざき画家か詩人になるのではないかと思わせるほどだったという(1880年5月5日付 E. V. Valentine 宛書簡 qtd. in Allen 142)。当然のことながら、寮室の壁は塗り替えられて落書きされた絵は幾層もの塗装ペンキの下に埋もれたままになったが、窓ガラスの「落書き」は破片となりながらも、その作者の正体を秘したまま、残ったのである。

## 5 楽園を追われて

人生には暗黒の暗闇がつきまとうものであるから、初めて自我が芽生える思春期のころに最初の暗黒の陰が兆すのは慣わしといってよい。生後半年にもならないうちに父親が蒸発し、3歳になる直前に母と死別するという、早くに人間存在の暗闇を見た幼子が、アラン家という幼年時代の楽園から追放されて、ふたたび暗い荒野にさまようことになる契機を与えたのがヴァージニア大学の在学期間であった。その二、三年前から、確かに思春期の悲哀が襲いはじめていた。幼い学友の母で彼の憧憬の女性だった Jane Stith Stanard 夫人の、彼の実母 Elizabeth Arnold Poe (1787-1811) の死を彷彿させるような夭折(1824年4月)、養母 Francis の健康の衰え、そして養父アランに複数の女性による婚姻外の子があることのそれとない感知(Allen 95 n., ff)、さらにそれと確認できないエルマイラ・ロイスターとの失恋。大学での17歳の一年は、幾重もの暗い陰におおわれた期間だった。そのころの闇から逃れるために、アルコールとカード遊びがあり、それがその年齢の青年にありがちな制御の効かないものになったとしても不思議はなからう。賭博による借財のために2年目の大学に戻ることをアランに禁じられたエドガーは、商人として養父の下で働く道を拒絶し、血縁なき養父母の家を出て、実母が劇団公演中、自分をこの世に送り出した地のボストンへと旅立つ。それは肉体の演技者としての実父母の確認と、ことばの演技者たる詩人としての自己確認のための旅だったのだろう。

失われた幼年時代の楽園追放者として、アメリカン・イシューメールはやがて文筆への道へと導かれていく。それは同世代アメリカン・ルネサンス期の Herman

Melville (1814-91) のたどる道とも重なる。楽園の遺産相続権を絶たれて放浪の旅の果てに、新世界の文学遺産の創造者にして被相続者となる文人誕生の契機である。私たちには、貿易商人になったポウやメルヴィルを思い描くことも、またポウやメルヴィルが不在のアメリカ文学を想像することも、けっしてできないのである。

#### 参考引用文献

- Allen, Hervey. *Israfel: The Life and Times of Edgar Allan Poe*. New York: Farrar & Rinehart, 1934.
- Bruce, Philip A. *History of the University of Virginia, 1819-1919*. 5 vols. New York: Macmillan, 1920-22.
- Foye, Raymond, ed. *The Unknown Poe: An Anthology of Fugitive Writings by Edgar Allan Poe*. San Francisco: City Light, 1980.
- Hammond, J. R. *An Edgar Allan Poe Chronology*. New York: St. Martin's P, 1998.
- Hayes, Kevin J. *Poe and Printed Word*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Kennedy, J. Gerald. "Edgar Allan Poe 1809-1849: A Brief Biography." J. Gerald Kennedy, ed. *A Historical Guide to Edgar Allan Poe*. New York: Oxford UP, 2001.
- Mabbott, Thomas Ollive, ed. *Collected Works of Edgar Allan Poe*. 3 vols. Cambridge, Mass. and London: Belknap P of Harvard UP, 1969, 1978.
- Miller, John Carl, ed. *Poe's Helen Remembers*. Charlottesville: UP of Virginia, 1979.
- Minutes of the Faculty of the University of Virginia. Vols. I, II. 12 April 1825-16 July 1830.
- O'Neal, William B. *Pictorial History of the University of Virginia*. Charlottesville: UP of Virginia, 1968.
- Ostrom, John Ward, ed. *The Letters of Edgar Allan Poe*. 2 vols. New York: Gordian P, 1966.
- Quinn, Arthur Hobson. *Edgar Allan Poe: A Critical Biography*. 1941. Baltimore and London: Johns Hopkins UP, 1998.
- Silverman, Kenneth. *Edgar A. Poe: Mournful and Never-ending Remembrance*. New York: Harper-Collins, 1991.
- Stanard, Mary Newton. *The Dreamer: A Romantic Rendering of the Life of Edgar Allan Poe*. Philadelphia and London: J. B. Lippincott, 1925.
- Thomas, Dwight and David K. Jackson, eds. *The Poe Log: A Documentary Life of Edgar Allan Poe*. Boston: G.K. Hall & Co., 1987.
- Weiss, Susan Archer. *The Home Life of Poe*. New York: Broadway Publishing, 1907.
- Wertenbaker, William. "Edgar A. Poe." *Virginia University Magazine* 7 (November-December 1868): 114-17. 本資料のタイプスクリプトとして筆者が入手した "Copy of Wertenbaker's Statement, University of Virginia, signed May 12, 1860 [sic]." 3 pp. では、署名年が誤記されていることは内容からも明白と思われる。
- Woodberry, George E. *Edgar Allan Poe*. Boston: Houghton, Mifflin, 1885.